

「テキスト主体 (Textsubjekt)」の有効性の検証

小野寺 賢一

近年ドイツを中心に展開されている抒情詩理論においては、「抽象的な作者 (abstrakter Autor)」(J. シューネルト 2004、W. シュミット 2021) ないしは「テキスト主体 (Textsubjekt)」(D. ブルドルフ ¹1995/²1997/³2015) とよばれる概念が争点の一つとなっている。両概念ならびに W. G. ミュラー (1979/2011) の「抒情詩の『私』 (lyrisches Ich)」の概念は、いずれも物語論における「内在する作者 (implied author)」(W. C. ブース 1961) と同等の次元に属するのだが、それぞれの規定は微妙に異なる。最大の問題は、物語論の場合と同様に抒情詩理論においても、これらの概念によって論じられてきた審級の必要性を疑問視する立場があることだ (J. ボルコフスキー/S. ヴィンコ 2011、C. ヒレブランド 2015、R. ツュムナー 2021)。本発表では各概念の違いを明らかにしたうえで「テキスト主体」に焦点を合わせ、その有効性について論じた。

D. ブルドルフによれば、「テキスト主体」とは読者が詩に「首尾一貫した意味」をみいだすために想定せざるをえない「分析的仮構物」であり、テキストの各要素を配置し、組織したと想定される主体を指す。これを想定することで生じる利益の一つは、文体においてのみ観察可能な文脈を発見できる点にある。このことをフリードリヒ・ヘルダーリンの哀歌「アキレウス」(1799) を例に説明すると、以下ようになる。この詩の前半ではアキレウスがブリーセーイスをアガメムノンに奪われ、海岸で母テシスに悲しみをうったえる場面が『イーリアス』の第1巻から14行にわたって引用される。そして後半では「私」が従属接続詞の wie (「~のように」) を用いて自身とアキレウスとを重ね合わせることで、恋人を強引に奪われたことを示唆するのである (「神々の子よ！もし私があなたのようにであったなら、/天上の神々の誰かひとりに心を許し、ひそかな悩みを訴えることができるものを」)。

伝記的背景に着目するならば、この詩はヘルダーリンの恋人であったズゼッテ・ゴンタルトとの別れと関連づけることができる。他方、ここで使用されている叙事的直喩ないしはホメーロスの直喩とよばれる修辞技法に着目するならば、それとはまた別の文脈をよみとることも可能である。すなわち、『イーリアス』の特定箇所の内容だけでなく、この叙事詩に広くみられる特徴的な修辞をも引用した、テキストの構成主体の「意図」を問うことが可能になるのだ。たとえば、ホメーロスの直喩によって結びつけられるのが第三者と第三者ではなく、第三者と話者(「私」)自身であることによって、悲哀の「抒情的」な表現のために、「叙事的」な対象描写ならびに修辞技法が用立てられている——そう考えることができる。そこに、「抒情的なものは叙事的なものにおいて完成する」というヘル

ダーリンの着想の源ないしは具現化をみいだすことも可能だろう。さらには、1801年12月4日付のカージミア・ウルリヒ・ペーレンドルフ宛書簡にみられるあの確信、すなわち、近代のドイツ詩人は古代ギリシャ人から「ユノー的な冷静さ」（卓越した技術）を学び、これを自らが得意とする「美しい情熱」の表出と結びつけなければならないというあの確信が、ここに先取りされていると考えることもできる。

こうした「意図」やその背景に想定されうる文脈は、テキストの修辭的次元に着目することによってはじめて発見可能となる。このときわれわれは「意図」の主体すなわち「テキスト主体」を想定せざるをえないが、この審級はテキスト内の「私」とも、書簡をはじめとする伝記的情報から再構成された作家像とも、またテキストの権利者であり、その全作品を束ねる審級としての作者とも異なる次元に属する。本発表では以上のことから、「テキスト主体」を仮設し、その「意図」を探ることによってはじめて浮かび上がる文脈がある以上、当該概念は一定の有効性をもつのではないかと結論づけた。